■2016年度　第２回研究会　＜事例紹介＞

今、大学図書館に求められている役割とは？

お茶の水女子大学における教育改革と入試改革の実践から見えてきたもの

森　いづみ　お茶の水女子大学　図書・情報課長

去る平成28年11月25日、私立大学図書館協会西地区部会東海地区協議会の第２回研究会において、お茶の水女子大学（以下、お茶大）の「図書館入試」を中心とした事例紹介をする機会をいただきました。

研究会全体としては、

①お土産を持ち帰られる内容・構成にする
お茶大の事例に加え、各館の現状や課題をグループワークで共有し、最後に「これからやってみたいこと」を宣言する。

②教育改革の要となるアクティブ・ラーニングを実体験できる手法を取り入れる
事前ワーク、グループワークによる共有→討議→発表→振り返りのプロセスを取り入れ、インタラクティブなやりとりのツールとして、リアルタイム投票ができる Web 版クリッカーを活用する。

という２つの目標を立て、３部構成のワークショップ形式（グループワーク＜パートⅠ＞、事例紹介、グループワーク＜パートⅡ＞）で実施しました[i)]。本稿は、このうち事例紹介の内容に加筆修正した記録です。

１．はじめに：前半のグループワークを受けて

午前中のグループワークで「他部署との連携に課題がある」「他部署と連携した事例報告を聞きたい」といった意見をいただきました。また、「『学習支援』という言葉をどのように捉えるかによって方法は異なる。利用者教育の次のステップに行くにはどうしたらよいか」「大学のミッションと現場での業務との関わりがまだ見えない」といった疑問点も出てきました。これらを踏まえて、まず図書館が大学教育にコミットする背景をごく簡単に振り返ります。次に学習支援関係の業務の変遷を辿り、どのような意識改革をしてきたのかご紹介します。メインはお茶大の図書館入試とその背景です。最後に、今日の研究会で一番重要なこと「私たちは何ができるのか」を考えるきっかけをお示しし、後半のグループワークにつなげたいと思います。

２．大学図書館機能の３要素、学力の３要素、大学教育の３つのポリシー

大学図書館の教育へのコミットは、従来から様々な形で実践されてきました。教育内容に関連した蔵書や、閲覧・自習場所の整備は、図書館の最も基本的な機能です。調査の手伝いや情報リテラシー教育、他大学からの取寄せといった人的サービスもあります。これら情報・空間・人という「大学図書館機能の３要素」は以前からあったのですが、中身が質的に変化してきたという印象を持っている人が多いのではないでしょうか。

中学・高校教育の現場では、「君たちが大学を卒業して仕事を得る頃には、今ある職業はもうないかもしれない」という強い危機感を持ってキャリア教育がなされているところもあると聞きます。高大接続システム改革会議の『最終報告』[ii)]では、そんな先行き不透明な社会でより良く生きるための能力として、「学力の３要素」が示されました。「十分な知識・技能」、「それらを基盤にして答えがない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力」、「これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」の３つです。

大学教育改革の流れを見ると、「単位制度の実質化」や「アクティブ・ラーニング」の推進のため、授業外で学ぶ場が必要という文脈で図書館の機能強化の必要性が指摘され、ラーニングコモンズに代表されるコミュニケーション可能な学習スペースが注目されるようになりました。図書館職員がもっと直接的に教育や学習支援に携わる必要があるとも言われています[iii) iv)]。図書館にとっては「追い風」です。それに乗って多くの大学が場所の整備を進めてきましたが、こうした場を活用した学びの充実が実際に進んでいるかというと、まだ工夫の余地がありそうです。

今回は皆さんに、大学のミッションや建学の精神に加え、ディプロマ、カリキュラム、アドミッションという大学教育の「３つのポリシー」について、予め調べて来ていただきました。実は、３つのポリシーを定めている大学は極めて多いけれども、相互に関連付けている大学は少ないそうです[v)]。平成29年４月には学校教育法施行規則が改正される予定で、「全ての大学等において、①卒業認定・学位授与の方針、②教育課程編成・実施の方針、③入学者受入れの方針の３つの方針を一貫性あるものとして策定し、公表する」ことが定められます。平成28年３月にはガイドラインが公開されました[vi)]。正直なところ、私はお茶大で「図書館入試」の話が出るまで、カリキュラム・ポリシー以外はあまり意識していませんでした。今は、平成25年８月の『審議まとめ』[vii)]で新たに見直された「図書館機能の３要素」を実現していくためには、「学力の３要素」や大学教育の「３つのポリシー」について理解し、実現に向けて取組む一員になる必要があると考えています。言い方を変えれば、我々の目的は大学教育を充分に機能させ、学生が自ら育つ環境を作ることです。それの一角を担うのが図書館であり、ミッションに合致する具体策を各々で考えることが、本日の研究会の重要なテーマだと思っています。

３．これまで関わってきた教育支援・学習支援業務の変遷

図書館の本質的機能は変わりませんが、求められる役割は時代とともに変わっています。東京大学に「情報リテラシー」という名の係ができた平成11年当時、上司だった方から「情報リテラシーって、そんなに頑張らなきゃいけないの？　教えてもらわなくても普通にできればいいじゃない。私たちはやればやるほどいらなくなる存在なんじゃないの？」と問われたことが、強く印象に残っています。「情報リテラシーが重要だ」「これからは学習支援だ」となると、当然のように一生懸命邁進しようとするけれども、「疑ってみる・本質を問い直す意識を持つことも大事」ということだったのかなと、思っています。

三重大学では、１学年3,000人規模で、頑張れば１年生の初年次教育で全員に情報リテラシー教育をすることができました。高校で情報科目が必修化する方針が出た時は、「大学で情報検索の基礎を教える必要はなくなるのではないか」と悩みましたが、実際には高校までの教育内容がバラバラで、却って格差が広がっていました。「パワーポイントの使い方を図書館で教えてほしい」という要望が先生から出た時は、「図書館がやるべき内容か」と疑問に思いながらも引き受けました。E-learning が始まった際にいち早く授業の講習会で取り入れたのも、教育改革を推進する先生方のパートナーになりたかったからです。図書館の枠組みだけで考えるのではなく、大学入学前後や、大学全体の教育環境、協働相手を意識するようになりました[viii) ix)]。余談ですが、ちょうどこの頃は「Web 2.0」というキーワードが世の中を席巻し、大学図書館の存在意義が問われた時代で、10年前に当研究会において「広報」や「ブランド化」について話させていただいた思い出があります[x)]。

国立情報学研究所の６年間を経て平成25年度にお茶大に異動し、図書館の現場に戻ってきました。着任早々、教育担当理事の先生から「図書館のLearning Adviser（LA）の財源は外部資金（プロジェクト経費）です。今年度一杯で終わるので、来年度の予算はありません」と言われ、かなり慌てました。その顛末は後から話しますが、何とかクリアして次にきた課題が図書館入試で、同じく教育担当理事の先生の案件でした。国立大学は今、運営費交付金を毎年減らされて、外部資金を獲得しなければ大学の運営が立ち行きません。平成26年度「大学教育再生加速プログラム」[xi)]への応募にあたり、「アクティブ・ラーニング関係は多くの大学がチャレンジするから難しい。お茶大は入試改革で行く。『図書館入試』というキーワードを出すよ」と言われました。その時「これは苦労するだろうな」とは思いましたが、それ以上に「『図書館入試』？　なんて素敵なんだろ

う！」とワクワクしました。「たとえ予算が通らなくても、大学独自の入試改革としてやるからよろしく」と言われ、このワクワク感を図書館や関係部署のメンバーと共有することが重要だと考えました。

4．図書館入試へのチャレンジ

「図書館入試」とは、従来のAO入試を改革した「新フンボルト入試」[xii]の一環で行うものです。一次選考を兼ねる文理共通のプレゼミナールと、二次選考（文系が「図書館入試」、理系が「実験室入試」）という二段構えで、単に知識の多寡を問うのではなく、「課題を探求・発見」し、「資料やデータを活用」し、「オリジナルな解を導き出す力」を問うというコンセプトです。平成27年度は、次年度からの本格実施に先立ち、プレゼミナールの体験版を行いました。写真①はレクチャーの様子です。この時は検索実習ができる環境でレクチャーを行いました。②はレポート作成の時間帯に情報探索をしている様子、③はパソコンでレポートを執筆している様子、④はグループディスカッションの様子です（図1）。

図1　平成27年度プレゼミナール
「図書館情報検索演習」の様子

世間的な反響も大きく、その多くは好意的でした。平成27年度のプレゼミナールを取材した読売教育ネットワークの記者さんからは、「なぜ文系と理系に分けたのでしょうか。（中略）『図書館は文系学生のもの』と考えているとも受け取れます」という質問を受けたのですが、実は、私自身も同じ疑問を持っていました。入試担当の先生からは「本学は入学後文理融合のリベラルアーツに力を入れているので、その看板を下ろすわけではありません。（中略）理系を志望する学生の基礎学力や意欲、探求力をしっかりと測るため、入口部分では文理に分けた方が適切と判断しました」という理由が説明されました[xiii]。アドミッション・ポリシーとカリキュラム・ポリシーのせめぎ合いが見えます。「図書館入試のプロセスは理系にとっても必要な能力だから、状況が許せば理系も参加できるようにしてはどうか」という話も出ているところです。大学入学後の初年次教育では、文理両方の全てのクラスで図書館職員が情報リテラシー教育を行っています。ただし「レポートを書く」というアウトプットのプロセスは組み込まれていないので、「他の授業でレポート執筆に生かされていたらいいな」と期待するところに留まっています。

一方SNSでは、やや揶揄したようなコメントも散見されました。「同じテーマに取組んで、『よーいドン』で、１冊しかない本を取りに走る体力勝負の入試なんですね」というのは、確かに起こり得る状況です。利用が重複する可能性がある図書の複本を用意することも検討しましたが、現実的ではありません。そもそも同じ図書に利用が集中するのは、与えられたテーマをそのままキーワード検索しているからで、テーマに対する掘り下げが足りていない証左とも考えられます。そこで、図書館からのレクチャーは単に情報検索の説明をするだけではなく、自分なりの切口をまず考えることや、手法としてイメージマップを用いること等も含めて説明することにしました。この結果、平成28年度の二次試験の受験生はテーマに対する独自の切口を設定し、様々なメディアを活用していました。受験生が30名で百数十冊の本が借りられましたが、そのうち利用希望が重なった本は僅か４冊でした。『よーいドン』の運動会にならずに済んだのは、課題に取組むプロセスや考え方をしっかり伝えられたこと、レポートのテーマ設定に工夫があったおかげだと思います。

事前の広報が功を奏したのか、平成28年度の一次試験に相当するプレゼミナールの参加者は従来のAO入試の約３倍、合格者は予定通り文理合計で20人でした。チャレンジする人が増えた点でも成功だったと思いますが、「受験の有無、合否にかかわらず、参加者にお土産を持って帰ってほしい」というのが、入試推進室長の先生の思いでした。入試はもちろん入学者を選抜する手段ですが「大学の学びを高校生のうちから知ってもらい、高校の学びをよ

り豊かなものにしてほしい」という、お茶大に入学しない人も含めた入学前教育にも位置付けられます。また、図書館入試で問われるプロセスは、社会に出てからも必要な能力です。仕事は頭の中にある知識だけではなく、先行事例や最新動向に学びます。蓄積された知識体系は重要ですが、それに加え、どこに行けばどんな情報があるか分かることも重要です。それらの情報を効率よく漏れなく調べた上で状況を把握・分析し、課題を解決することができる、社会に出て活躍できる人材を輩出することにつながります。この能力は、頭の中の知識だけで一点刻みの入試を通過させるための教育だけで培われるものではありません。新フンボルト入試の実施は本当に大変ですが、アドミッション、カリキュラム、ディプロマの３つのポリシーを体現できるコンセプトなのです。だから、強い使命感やモチベーションが保てるのだと思います。

最大の難関は、ネットワーク使用可否の判断でした。可にすれば、ネットの掲示板に「○○とは何ですか」と書き込んで、外から情報を得るといった事態も想定されます。当初は、「不正防止のためにはネットワーク禁止もやむを得ないのではないか」とう意見もありました。その言葉に従えば、楽だったかもしれません。しかし現在の大学図書館ではネットワーク上の学術情報抜きで機能を十分に果たすことはできません。禁止すれば、「本学図書館を自由に使ってレポートを作成することを通じて大学での学びを体験してもらう」というコンセプトが生かされず、せっかくの「図書館入試」が骨抜きになってしまいます。では、どうすればネットワークを使いつつ不正を防止することができるのか、喧々諤々の議論がありました。アクセス先の限定（例えばOPACなど特定のドメインネームを個別に指定する、あるいは逆にアクセスさせたくないドメインを指定する）も現実的ではありません。そこで、ログを全て記録すること。不正の疑いがあった場合はログを確認すること。そして受験生にもこのことを説明することになりました。技術的なことは情報基盤センターに協力していただき、図書館職員及びTeaching Assistant（TA）の学生を少人数グループごとに付け、サポート兼監視役としました。これで何とか、ネットワーク上の情報も使ってよいという方針が決まりました。

図書館界の蓄積が役に立ったと思うのが、国立大学図書館協会で作成した『高等教育のための情報リテラシー基準』[xiv] です。この基準は、「課題を認識し、その解決のために必要な情報を探索し、入手し、得られた情報を分析・評価、整理・管理し、批判的に検討し、自らの知識を再構造化し、発信する能力」を6つのプロセスに分け、例えば「OPACが使える」「読み手を意識してレポートをまとめることができる」「情報の典拠を明示し適切に引用できる」といった要素を体系付けたものです。これをミーティングの場に出して、「今先生が話題にしているのは、この要素ですね。ここは先生からおっしゃっていただけますか？」「ここは図書館が説明します」というように、役割分担を決める際に活用しました。

このようにして、環境整備からレクチャー用の資料の作成、レポート作成のサポートまで、入試推進室、入試課、情報基盤センターの関係者と何回もミーティングを行い、事前準備、当日の運用、役割分担、リスク軽減策などを検討していきました。

ここで、平成27年度のプレゼミナールのアンケート結果を紹介します。午前午後２回実施し、約90名が参加しました。レクチャーの「理解度」は、「とても分かりやすかった」「分かりやすかった」がかなり多く、「少し難しかった」人が１割くらいでした。「有益度」は、「とても有益」「有益」が、合わせて90％を超えました。少々難しかったけれども、役に立ったと思った人が多かったようです。また、レポート作成の際の図書館の助言は、「有益だった」とか「少し役に立った」が100％でした。これらの結果から、満足度は高かったということがうかがわれます。使ったリソースは、図書館の蔵書とウェブサイトの両方を使った人が最も多く、その次が、図書館の蔵書のみを使った人でした。これらの結果は、図書館の中にラーニングコモンズがあることの意味を示していると思います。

平成28年度のアンケート結果もほぼ同様の傾向で、自由記述では「大変だったけれど楽しかった」という声が非常に多く見られました。ただ、二次試験におけるレファレンスサービスは封印されました。長時間にわたり、誰にも相談せず１人でテーマに向き合って書き上げるというプロセスを「楽しかった」と言えるのは頼もしいですが、実際の大学の学びでは、レファレンスやアカデミック・スキルズに関わる相談を大いに推奨しています。試験終了後に人的支援について説明をする時間をいただけたのは、とてもありがたいことでした。他にも、「これからの学びに役に立つし、自分に足りない部分が

分かった」「グループワークをすることによって、さらに掘り下げられた」という感想が見られました。入試に関わった先生からも、「２日だけでも受験生がどんどん成長していくプロセスが見られた」「大変だったけれどもやりがいを感じた」という声が聞かれました。

このような結果から、図書館入試は高大接続の『最終報告』で指摘された「学力の３要素」を身に付けるための１つのモデルになり得るのではないかと思っています。『最終報告』では、「先行き不透明な社会」の中で「高校や大学は、社会の基盤を形成するための公共財」と位置付けられ、「どのような境遇に置かれていても、教育を通じてそれぞれの道で活躍できるような社会を実現」するために、関係者は「広く社会全体で知恵を出し合いながら取組む必要がある」と述べられています。

そこで、図書館は一人一人のライフステージで情報リテラシー、もっと言えば生きる力を身につけられる場になれるのではないかという願いを込めて、社会と教育と図書館との関係を図に示してみました(図2)。社会の中で、小中高の学校教育の中には学校図書館があり、大なり小なり教育に携わっています。学校によっては調べ学習が盛んで、既にアクティブ・ラーニングを取り入れている事例もあると思います。ところが、大学入試対策でそのような取り組みは断絶してしまいがちです。図書館入試を含むお茶大の新フンボルト入試は、まさに入試改革によって教育の「断絶」を「接続」に変えて行こうという取組みなのです。プレゼミナールは高校の先生などにも見学していただけるので、学校司書の方が先生と一緒に来てくれるケースも出てきました。また、高校の司書教諭の先生や司書さんと対話する機会も増えました。「大学の入試が変われば高校の教育も変わり、高校教育における図書室のあり方も変わっていくのではないか」という期待が寄せられています[xv]。

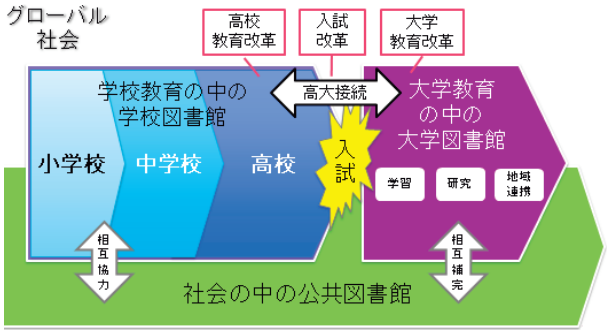

図2　社会と教育と図書館の関係図

５．図書館入試に至るまでの取組

ここまで、大学個別で行う入試の事例としてお茶大の図書館入試を紹介してきました。平成32年度大学入試（平成33年１月実施）からは、現在の大学入試センター試験に代わって「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が導入されることになっています。「知識･技能」のみならず、これらを活用する「思考力・判断力・表現力」が問われることになります。具体的な実施策はなかなか難しいようですが、より広範囲に影響が及ぶと考えられ、動向を注視していかなくてはならないだろうと思います。

お茶大の図書館入試は、今はまだ特殊な事例かもしれません。しかし図書館入試の背景を見ていくと、身近な取組みの蓄積があったことが見えてくると思います。図書館が教育にコミットするには、「教職協働・教員との信頼関係の構築が大切」とよく言われますが、お茶大は次の３つの取組みを通じて育んできました。

（１）情報リテラシー教育

初年次教育の必修授業やクラス単位のオーダーメイド講習会など、積極的に関与してきた

（２）学びの場づくり

ラーニングコモンズやキャリアカフェを設置し、学内の学習支援部署とのネットワークを築きつつ、学びの場を提供してきた

（３）人的支援策の展開

図書館内で学習サポーターとして活動する大学院生を、従来の ICT リテラシー中心の LA からアカデミック・スキルズ全般の支援を担う LALA(Library Academic Learning Adviser) にリニューアルした

こうして列挙すると、次々と新しいことにチャレンジし続けたように見えますね。実際にその通りなのですが、新しいことを始める際は、従来の業務の見直しもしてきました。業務が増える一方では現場は疲弊してしまいます。目の前の作業に追われ、中長期で物事を考える余裕が持てず「新しいことにチャレンジしない理由」になってしまいかねません。もう１つ、新しいことを始める時に大切なのは、頑張った先にどれだけ良いことがあるのか、はっきりとしたイメージを関係者で共有することだと思います。例えば利用者の喜ぶ顔を思い浮かべることができる、業務が効率化し職場環境が良くなる、といったようなことです。

５－１．情報リテラシー教育

お茶大図書館の情報リテラシー教育の取組は、平成19年頃に始まり、平成21年度からは課内プロジェクトグループとして活動してきました。ただ、午前中にも出たように図書館主催の講習会は参加者が少ないという悩みがありました。広報を工夫する余地はありましたが、思い切って費用対効果の観点（１回あたりの参加者数など）から春秋の定期講習会を休止することにしました。もちろん、本当に止めても良いのか悩む担当者の気持ちは理解できます。担当者と膝を突き合わせて相談し、普段のレファレンスでも対応できることを確認したうえで、準備や実施のコストに見合う参加者が得られる文献管理システム講習会は継続する、授業やゼミ単位のオーダーメイド講習会はより一層力を入れる、という方針を決めました。入試担当の先生はオーダーメイド講習会の常連さんだったので、図書館に期待してもらえたのだと思います。「内容が今のままで良いのか」という悩みもありました。それを解消するために使ったのが『情報リテラシー基準』です。グループのメンバーが集まり、講習会テキストを一枚ずつチェックし、そのページで何を説明しているのか分析します。その際、『情報リテラシー基準』の体系表を文字通り要素ごとにハサミで切って、テキストの該当する場所に貼り付けていきました。その結果、レポートの体裁や引用方法、著作権法などの説明が足りないことが分かり、追加することになりました。不安や悩みを抱えていた担当者が、客観的な評価に基づき対策を講じたことで「自信につながりました」と笑顔で報告してくれた時は、本当に嬉しかったです[xvi]。

５－２．学びの場づくり

お茶大では、国内ではかなり早く平成19年度にラーニングコモンズ、キャリアカフェといったコモンズスペースが図書館内に設置されました。きっかけはキャリア教育の外部資金を獲得した先生が学内で場所を探していた時に、図書館がいち早く誘致したという経緯があったそうです[xvii]。コモンズスペースは、「共に学び共に成長する」という理念に基づき、物理的な壁のみならず人と人との壁を取り払い、学生同士はもちろん、職員と学生、教職員同士が共に協働し、高めあえる場として設置され、活用されてきました。

キャリアカフェでは、学生・キャリア支援センターが主催する企業説明会やOG懇談会などのイベントがよく行われています。図書館は学生さんにとって普段の行動範囲の中で気軽に来られる場所ですし、通りかかっただけの学生の気付きになるメリットもあります。企業側から見ても「大教室で就職説明会を実施すると学生さん側と企業側が完全に分かれてしまう。しかし図書館の中でイベントをすると学生さんが近く本音も出やすいし、普段の様子がよく分かる」とのことで、付加的な効果に気づかされました。そこで、留学関係にも対象を広げ、国際課やグローバル教育センターとの連携で交換留学報告会なども行っています。図書館としても、場所が活用されることで入館者数が増え、それに伴って蔵書の貸出数も伸び、学びのバリエーションが豊かになりました。こうしたイベントは、協働相手の人的体制や予算によって頻度や内容、方法が変わりますが、お互いの事情を理解しあった上で融通しあえることもあります。

このような経緯で、図書館入試で必要とされる多様な空間は、既に図書館の中にできていました。また、関係部署との協働による様々な実践を通して、学びを多角的にサポートする人的ネットワーク（顔の見える関係）が構築されていきました。

５－３．人的支援の展開

これまで見てきたように、お茶大はコモンズスペースを図書館内に設置し、様々な部署と連携し、図書館の入館者も増え、スパイラルアップを呼び込む職場文化が育まれてきました。一方で、難しい局面にさしかかっていました。その１つが、Learning Adviser（LA）の経費です。また、LAの相談内容がICT関連のトラブルシューティングのみという状況もあります。もちろん、ICTサポートも需要が高く重要ですが、「それがラーニング・アドバイザーの役割ですか」と質問されたこともあります。外部資金終了後、学内予算を付けてもらうには「従来通り」では通用せず、新機軸を打ち出す必要がありました。

そんな中、新しい図書館構想に取組むというミッションが学長から与えられ、平成25年６月にワーキンググループ（WG）を設置しました。メンバーは各分野の教員と職員が４名ずつの少人数で始めました。タイミングよく８月に『審議まとめ』が公開されたのを受け、情報（蔵書・コンテンツ）・空間・人という「大学図書館機能の３要素」を柱に、お茶

大らしいコンセプトを打ち出そうと意気込みました。並行して、創立140周年の記念事業で「図書館増築」を目的とした寄付集めの企画も始まり、「ピンチはチャンス！」と前向きに捉えることができました。

WG では空間的観点から建築の専門家を招いた勉強会、コンテンツの観点では電子教材についての勉強会も行い、教育開発センターや情報基盤センターの教員にも参加を呼びかけました。「そもそもアクティブ・ラーニングとは」ということも何度もディスカッションしました。WG メンバーのうち、建築専門の先生が学内の特別予算でワークショップ形式の授業[xviii]を行っており、事例紹介をしてくれました。学生がグループに分かれ、事前調査やフィールドワークを行い、外部有識者を招いて企画発表会も開きます。こういった授業は、伝統的な教室ではでやりにくいという話があったので、次年度はぜひ図書館のキャリアカフェを活用してくださいとお願いしました。内容は、例えば「高齢者向けの新しいサービスを企画する」というテーマが設定されると、現在どういうことに困っているのか、既にあるサービスにはどんなものがあるのか、マーケティングを行います。今までにない新しいサービスを開発する授業なので、リサーチが非常に大事です。しかし、意外とリサーチが上手くいかないケースもあるとのことで、図書館がサポートできるのではないかと思いました。このディスカッションで気づいたのは、学習のプロセスは一方向ではないということです。グループワークでは１回で結論が出て終わるのではなく、アイデアを持ち寄ってディスカッションし、そこで出たアイデアを２回目以降で見直し、最終的には合意形成し、成果発表まで持っていくのですが、集合して行うミーティングの間には、調べ直しや戦略の立て直しといった個の作業も必要です。行ったり戻ったりを繰り返しながらブラッシュアップするのだから、各プロセスにそれぞれのサポートがあってしかるべきではないかと考えました。

別の観点では、図書館内で学習支援が必要だと言っているけれども、既に学内で様々な支援が行われているはずです。しかしどこでどのような支援を行っているのか把握していないことが数多くあったので、調査することにしました。総合学修支援センターでは履修方法をアドバイスしていることや、教育開発センターが教学 IR に取り組んでいることを知り、所属する教員や相談員さんとの対話の機会を持つことができました。また、卒論執筆中の学生や各学科に聞いたところ、お茶大は少人数制を生かし論文の書き方は個々の先生が指導しているけれども、論文の書き方に関する資料があるのはいくつかの学科のみでした。また、「基本的な指導をしてくれるところがあれば、教員は中身の指導に専念できる」という意見も聞かれました。

調査の結果、アカデミック・スキルズ全般を体系的に教育する場はないこと、各部署がそれぞれ役割を担っているものの全体的に見渡す存在がないことが分かりました。一方、図書館は自らが専門分野を持たないケースが多いですが、基礎的な部分で全体を見ることができるという強みがあります。こうした状況も踏まえた上で、平成26年２月に新図書館構想 WG の報告書を提出しました。この時点では、図書館増築の実現可能性は見えておらず、「増築は多額の予算が必要だからすぐには実現できないけれども、人的支援は少ない予算で強化できる。まずはそこから始めましょう」という機運が高まりました。

こうして、LA の後継のあるべき姿が見えてきました。目標は、ニッチなニーズを掘り起こし、場の提供といったハード面だけではなくソフト面での展開を図り、大学が目指す方向性に沿った学内の学習支援活動において欠かせない存在になることです。学内の様々な学生向けサポートや教育内容をつなぐハブ機能と、研究支援まで視野に入れたアカデミック・スキルズのサポート機能を担う新しい制度を、関係部署と連携して図書館が中心になって創りたいという提案を、学長戦略機構会議にて行いました（図3）。

２回の見直しを経て、学内経費を充当する価値があることが認められ、予算を獲得することができました。当初は「学修支援」と表記していましたが、教育担当の理事の先生から「学修は単位の修得に関わることだから、図書館での支援は学習のほうがより良いのではないか」という指摘を受けました。これ以降、大学全体で用語を統一する時以外は「学習」を使っています。愛称は、学内インターンシップの一環として活動している学生協働の LiSA（Library Student Assistant）と対になるよう、愛らしさも狙って LALA（Library Academic Learning Adviser）としました。

図書館入試の話に戻ると、参加者や受験生をサポートする TA として活躍できる LALA の存在も大きかったのです。

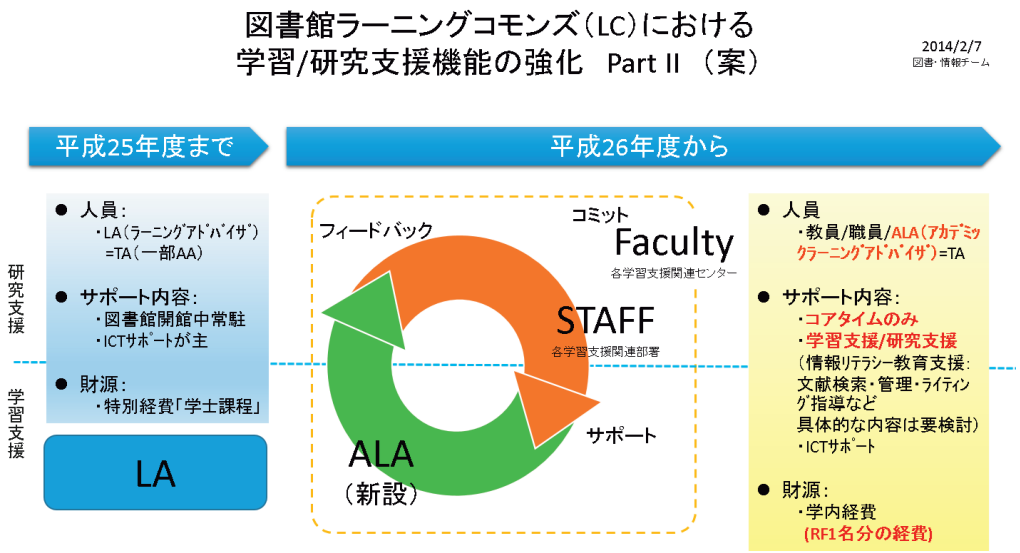

図3　図書館ラーニングコモンズにおける学習 / 研究支援機能の強化

6．学生協働と学内協働による拡がりとつながり

LALA にリニューアルした後の質問内容はどのように変わったのでしょうか。全体の利用数は、LA の時よりも格段に増えています。ただ、その内容はまだまだ ICT サポートが圧倒的に多いのが現状です。この実態に対して、図書館職員だけではなく、LALA 自身が課題意識を持ってくれたのは、とてもありがたいことでした。１年目の最後あたりから月に１度、LALA ミーティングを行うようにしたのですが、「どうして ICT サポートの質問ばかり来るんだろう」という疑問に対して「それはパソコンのそばにいるからではないか。だったら、学習支援関連の入門書を近くに置けば、そういうことを聞ける存在だと分かってもらえるんじゃないか」という仮説を立て、LALA 文庫という学びの本を集めたコーナーが実現しました。それでも伸び悩んでいたところ、今度は LALA 文庫の利用統計から、一番よく使われているのがレポートや論文作成の入門編で６割。中級や上級まで合わせると、6.5割ぐらいが学びに関係する本だったという結果を出してくれました。「需要が高いということが明らかなので、工夫次第でアカデミック・スキルズ系の相談が増えるのではないか」ということで、今現在、次のステップに向けたアイデアを検討してくれています。こうした取組みは、学内の FDSD 研修[xix] や、図書館総合展における全国学生協働サミットでも発表していただいています。「共に学び共に成長する」をキャッチコピーにして、「LALA 自身が一番のアクティブラーナーだ」と気付いてくれたことは、図書館職員にとって一番の喜びでした。

更なる展開を２つご紹介します。１つは留学生相談室を担当している先生が LALA の活動に興味を持ち、積極的にコミットしていただけるようになったことです。「留学生が日本語で書いた論文の日本語を直す」という役割で、チューターさんたちは日本語の添削はできるのですが、その背景にある「ライティングサポート」の考え方について説明を受けたことがなく、教育体制が整っていないとのことでした。一方、LALA は、様々なトレーニングプログラムを実施して資質向上に努めていますが、体系的な教育体制は整っていません。また、LALA とチューターを掛け持ちしている大学院生が、両者のハブになってくれているケースも見られました。そこで、両者が顔の見える存在になること、それぞれの役割を知ることを目的として合同トレーニングプログラムを行うことになり、留学生相談室担当の先生が「大学院生チューターの学内連携と協働を目指して」というタイトルでレクチャーをしていただいたのです。LALA の予算要求の際、教員と職員と学生の協働を描きましたが、「絵に描いた餅」になっていることがずっと気になっていました。それが実際に食べられる餅になったことが嬉しく、さらに美味しい餅にしていけるのではないかと期待しています。

もう１つは学務課との連携です。きっかけは、６年ごとに設定する大学の中期目標中期計画に「学修環境を向上させるために TA を活用する」という目標が設定されていたことです。平成27年度は第２期が終了する評価の年で、学務課と図書・情報課でし

ばしば「教育に携わる学生をどのように生かすか」という話をしていました。そこで、他大学の教育改革の事例を学務課と図書・情報課の若手・中堅が一緒に聴きに行き、学内でフィードバックする場を設けることになりました。この動きは担当者が自発的に発案したものです。両課のみならず全学の事務職員を対象にすること、お茶大で教育改革を推進した先生にも講演していただくこと、聴くだけではなく自分たちで考える場にすることを目標とした勉強会が実現しました。勉強会には総務、入試、企画戦略、評価室、附属学校など、様々な部署の人たちが集まり、「お茶シる」という愛称を付けて、今後も継続することになっています。

7．さいごに：後半のグループワークに向けて

最後に新図書館構想 WG のその後をお話しします。WG は概算要求 WG と名称を変え、文科省への概算要求を行いましたが、２回挫折しました。寄付事業で集まった基金や第２期中期目標期間中の目的積立金を元手に自己資金で増築することが決定され、改修のみを学内第１位で出していただき、ようやく平成28年度補正予算をいただけることになりました。平成29年度着工、竣工、平成30年度にリニューアルオープンの予定です。今は増築・改修計画 WG となって鋭意活動中です。

駆け足でお茶大の事例を紹介してきました。増築・改修の実現は４年間取組んできた成果ですが、大学の意思決定次第、というところが大きいと思います。また、図書館入試もある意味特殊な事例だったかもしれません。そこで、条件が違っていても、今この現状の中で何ができるのかを考えるヒントになりそうなことを３つ提案したいと思います。

１つは、図書館の外側から発想するということです。図書館がどうしたいかではなく、学生さんは何を求めているか、先生方や他部署の職員は何に困っているのか、大学は何をしたいのかを掴み、それを実現するということです。巡り巡って、図書館にも良いことがあるかもしれません。

２つ目は、私たち自身が課題解決のリソースになろうということです。新しいことにチャレンジする人は、孤独や悩みを抱えていることが多いです。「やりたいことがあるけれど、乗ってくれる人が身近にいない」という話も聞こえます。そこにいかに寄り添えるかということです。もちろん、何もかも引き受けることはできません。人的・物理的制約もあります。しかし、分相応かどうかとか、従来からの図書館の守備範囲かどうかに拘っていては、大学全体で見たときの最適な解は出せないのではないでしょうか。さきほどの学務課との連携も、学務課が担当している計画について、たまたま図書館が実績を作っていたので第２期の目標を達成することができ、第３期は一歩進めて両課が協働して担当することになりました[xx)]。互いの職場文化の違いを尊重しつつ、「一緒にやろう」と声を掛け合ってくれた担当者たちに感謝したいと思います。

３つ目は、理想や構想を描きつつ、身近な一歩を踏み出そうということです。「大学のミッション」や「３つのポリシー」に言及しましたが、実際には現場の仕事とはかけ離れていて、業務改善やサービス向上に結び付けるといっても、難しいですよね。ではどうやって間を埋めるのかというと、やはり皆さんが所属する大学で、今大事なことは何なのか、悩みはどこにあるのかを知ることが、出発点なのではないかと思います。私の好きな言葉「ヒントは外にある。答えは中にある」を皆さんに贈りたいと思います。図書館は学内で「建物も違うし、何をしているかよく分からない」と思われがちですが、「実は大学全体について考えているんだ」と思ってもらえれば、格段に相談しやすくなります。はじめから完璧でなくてもいいのです。最初の一歩を踏み出せれば、その一個一個の小さい取組みや、一人一人のコミュニケーションの積み重ねが、大学を良くしていくことにつながり、その結果、図書館の存在意義をも高めていけるのではないでしょうか。

私からの事例発表はここまでとさせていただきます。この後のグループワークや皆さんの取組に、少しでもご参考になることがあれば嬉しいです。ありがとうございました。

注

i）2016年度私立大学図書館協会西地区部会東海地区協議会第2回研究会プレゼン資料（平成28年11月）<http://hdl.handle.net/10083/60546>

ii）高大接続システム改革会議「最終報告」（平成28年3月）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/033/toushin/1369233.htm <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/031/houkoku/1338888.htm>

iii）文部科学省科学技術・学術審議会 .『学修環境充実のた

めの学術情報基盤の整備について（審議まとめ）』（平成25年8月）<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/031/houkoku/1338888.htm>

iv）『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）』（平成24年8月）<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm>

v）濱名篤 . 三つのポリシーに基づく大学教育への質的転換について , 大学基準協会ニュースレター , No.57（平成28年10月）<http://www.juaa.or.jp/images/publication/pdf/juaa57.pdf>

vi）中央教育審議会大学分科会大学教育部会 .「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマ・ポリシー），「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラム・ポリシー）及び「入学者受入れの方針」（アドミッション・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン（平成28年3月）<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/__icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369248_01_1.pdf>

vii）iii に同じ

viii）杉田いづみ他 . 三重大学附属図書館における情報リテラシー教育支援 : 学部初期の「授業と連携した」講習会を中心に , 薬学図書館 , 55巻2号（平成17年）<http://hdl.handle.net/10076/2725>

ix）杉田いづみ他 . e-learning システム“三重大学 Moodle”を活用した図書館情報リテラシー講習会 , 薬学図書館 , 52巻3号（平成19年）< http://hdl.handle.net/10076/7634>

x）杉田いづみ . 大学図書館を取り巻く環境変化と図書館の広報戦略ー図書館サービスのブランド化を目指してー, 館灯 , 45（平成19年3月）<http://ci.nii.ac.jp/naid/110006320697>

xi）大学教育再生加速プログラム <http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/ap/>

xii）お茶大発新型 AO 入試（新フンボルト入試）について <http://www.ocha.ac.jp/news/h280126.html>

xiii）入試改革で学びの「中核」に ー大学図書館の未来像（平成27年9月）<http://kyoiku.yomiuri.co.jp/torikumi/jitsuryoku/iken/contents/post-417.php>

xiv）国立大学図書館協会教育学習支援検討特別委員会『高等教育のための情報リテラシー基準2015 年版』<http://www.janul.jp/j/projects/sftl/sftl201503b.pdf >

xv）森いづみ . 新しい時代にむけた教育改革を図書館は推進できるか ーお茶の水女子大学「図書館入試」のチャレンジー , 図書館雑誌 , 110（平成27年7月）<http://hdl.handle.net/10083/59986>

xvi）餌取直子 . お茶の水女子大学附属図書館における『高等教育のための情報リテラシー基準』の活用事例 : 担当者の自信と心の余裕につなげるために <http://hdl.handle.net/10083/58226>

xvii）茂出木理子 . ラーニング・コモンズと図書館　～お茶大図書館改革の裏側を語る . 北海道地区大学図書館職員研究集会記録 Vol.52（平成22年2月）<http://hdl.handle.net/10083/48982>

xviii）ライフ・イノベーション・ワークショップ・プログラム：LIDEE <http://www.hles.ocha.ac.jp/ug/eng/gakkamenu/d001536.html>

xix）矢野智子 . お茶大のアクティブ・ラーニングにおける人的支援の取組紹介 : LALA / Library Academic Learning Adviser を中心に , お茶の水女子大学 FD/SD 研修2016「アクティブ・ラーニングの現場で生きる人的支援と空間～日本、フランス、世界の動向から今後のあり方を考える～」発表資料（平成28年7月）<http://hdl.handle.net/10083/59846>

xx）平成28年度 国立大学法人お茶の水女子大学 年度計画 (3) 学生への支援に関する目標を達成するための措置 <http://www.ocha.ac.jp/introduction/hyouka/info/hyouka03_d/fil/120406_30hyouka-kekka.pdf>